

語りのなかで

話したい語って聞かせたい素材があれば、楽々でしょう。素材のない世界は真っ白、透明なものかもしれません。そこに点でも線でも描き出すように、まずは思い描いたシルエットを載せていきましょう。そして、身近にあって関心のあること、自分にとってこれが一番うまく語りきれるところのなかで念じてみることで、自分が理解していることより、むしろ、自分が疑問に思ったりしていること、そこに思いの丈、自分を投げ出してみてもいいかなものでしょう。

きっと、いい雰囲気があるあなたの周囲に漂い始めることでしょう。そう！見事に描けだしてきているからです。「絵画化された世界」には、多様な模様と美しい色彩があふれ出しています。

これに決め手の数字データを書き込めると、いっそう物事がはっきりしてくるので。あと、どのくらいと聞かれたとき、あと十一メートルだよときっと、目測で測りきれたように…。あと何分って尋ねられたとき、あと五分と計測したときのように…。もののはじめとおわりがわかりだしたときのように…。そうした、常に前向きな姿勢で立ち向かっている自身をここで褒めてあげることでしょう。人はあなたの心の解き放ちの瞬間を今か今かと待っていますヨ。

こんなすてきな時間を共有できる人と人との交流です。波長の整った出会いは、風に波面がさざ立つように、ゆるやかに規則正しくゆらりゆらりと揺れながら映っていきま。すかした花びらのように、天からの恵みの雨水を蓄え潤い、容量がいっぱいになって溢れそうになってへし折れそうになったら、そとすかすのです。これが自然の摂理なのでしょう。「蝦夷すかし百合草」のようにです。きっと、いい語りがあるあなたを包んでくれることでしょう。

語らいの三つの要素をことばで紡ぐと、こういう感じとなっていきます。最後に、あなたの「ほほえみ【微笑】」を大切にしましょう。あなたの「ほほえみ」は、口をつむいだ「ほほえみ」か？それとも、白い歯を惜しげもなくさす「ほほえみ」か？それは自分で確かめておくことです。

話題の選択 話の構成 語句の選択利用 音声表現

もう、あなたは話題を選びきれていますか？自らがよく知る教養性の高い知識を扱うか、こころの思いや感想を扱うかという選択もあるでしょう。でも、どちらにも大切なことがあります。それは身体的か非身体的かということ、自らが体験したことと耳で聞いたり、目で見て得ただけの知識ではその物事に対する理解度・信頼度も大きく異なっています。自己体験は「百聞は一見に如かず」という諺に云うように説得力を備えて

います。たとえば、今日DVD技術の普及により、安価な値段で昔上映された映画が観られるようになったという話題を例にして、映画の話が話題になります。そのなかで、オードリヘップバーン主演の映画「ローマの休日」の舞台となった「ローマの遺跡とその町並みは、今もその美しさをとどめています」といった表現が生まれてきます。これは、映画を観て、実際にイタリア国ローマに出かけた人でないとその実感を次に旨く表現しようにもできないことになっているからです。それは、話の展開として、スペイン広場でのジェラードは、どうしてこうも好い味わいなのかを伝えていくことにつながってまいります。

次に、このことが一度限りの体験なのか、数度となく異なる季節や時間帯で同じ光景を見定めているかということがその深みを生み出していきます。一回限りは、事件に過ぎないのに対し、複数の場合は、際だったものへと発展させていくことができます。「際立つ物」とは、現在進行形そのものの話題であり、ニュース性の富んでいるものがあります。上記のオードリヘップバーンは、もうこの世に存在しない過去の女優でありながら、彼女の映画を観た経験のある人は、日本のCMに登場する彼女を今も生きているかのように扱って観ています。そこに永続性ある事実となって際立ってくるからだと思うからです。

第三に、聞く側のことも考えねば成りません。相手側にも既知の事柄と未知の事柄があるからです。話し手のこちら側が知っていても聞く側の相手の多くが知らないとなるとことは旨く運ばなくなってしまいます。この点には、よくよく留意せねばなりません。

第四に、「真実」と「虚偽」、「事実」と「虚構」かを見定める能力が必要となってきます。「講談師見てきたような嘘を言い」ということばがありますが、まさに、この話題が本統のことなのか、はたまた虚構された物語文学の世界かと人は必ず考えを廻らします。このとき、話し手はこのことを明確に相手に伝えておくことが大切となるのです。

飛びつく話題とは

自己中心である人にとっては、自分の名前がどう取り扱われるかでその関心度は大きく変容します。実名であるか偽名であるかを問わず名前の呪縛性は、人の関心へと向かうものです。名前はまさに「名詮自性」ということでしょうか。自分に関係することには、それなりの関心事として働いていくのです。電話帳などに見えている自分ではない同じ苗字・名前の人物がふと気になるようにです。自分という人間は、いつでも大切な存在であるからでしょう。逆に、他人を褒め称えることと、他人を譏り貶めることは如何でしょう。きっと、譏り貶めることの方が多く、褒め称えることは数少ない話題となっているでしょう。趣味の世界での話題はどうでしょうか。レベルに差がある場合は、相手から聞きたい、知りたいがあるやもしれません。しかし、同レベル以下ではさほどの意欲性ある行動は見られなくなります。高いレベルを求めんとするとき、こうした話題への関心度が生じてくるからです。そして、自分だけが知っている他人の知らない

世界はとても貴重な話題提供となっていきます。室町時代の世阿弥が「秘すれば花」と表現したこのことが言い得ているのです。「あなたにだけに教えてあげますわ」とか「ちょっとだけよ」という特定人物への発言は、相手の心を心地よく擦っていることに成りかねないからです。

これを次に聞き手を想定したときにはどうでしょうか。自己の行動力につながる話題、自身の知識教養へと発展していく話題、自分が既に聞き及んでいる話題(補充性)、自らを充足させる話題、聞く愉しさを提供してくれる話題、聞きたいと感じさせる話題がこの飛びつく話題の中核となってくるのです。これに優先順位を付けることが必要となるのかは、その人が決めることに向かう方向に影響していきます。豊富な話題を持ち合わせていることでその真価は常に発揮されるでしょう。

話の構成と話題の排列

「前置き」は必要でしょうか？ ないことも時としては認められます。でも、聞き手の親近感や相互の理解度は、この前置きが果たす役割でもあります。他人には郷里自慢のように聞こえる話でも、相互の結びつきを感じ取れたときの運びの良さは誰もが感じていることかと思えます。このことが「前置き」の魅力なのです。

「本論」とっておきの主題の位置をどこにするかで決まります。一番先頭に置く場合もあります。聞き手には「待っていました」という心を想起させる点で有効な方法です。「緩急自在」がこの主題の位置にはあります。逆に、聞き手が歓迎しない主題内容を持ち出す場合は、この手法は逆効果となります。

「締め括り」は、余韻を与えて終わりたいところでしょう。あの話し、次を聞いてみたいということがあってしかりです。この余韻ある締め括りをどう聞き手に伝えるかで話は尽きないのではないのでしょうか。

この「前置き」「本論」「締め括り」を繋げるのに、前に学習した「しぐさ」表現が大切になってきます。また、「ことば選び」も大切な一つです。

たとえば、「固有名詞」ですが、北海道の七月は、野にたんぽぽのような黄色いすくっと上に伸びた花があちらこちらで咲いています。この帰化植物である花の名前を紹介するときに、「[ブタ草](#)」って云うのです。と伝えて言いますと、青い澄み切った空と緑の草に栄えた黄色のこの花のイメージから急に醒めてしまいがちでしょう。では、どう表現しましょうという思案なのです。「ぶた【豚】」は、本来きれい好きな動物です。なにアレルギー鼻炎のモトだとか...

- 1 , 生き生きとしたことば
- 2 , 笑いを引き出すことば
- 3 , 心地よさを持続させることば
- 4 , 力強さをあたえることば